

## “憑依する作法展”用 指示書 ～自作において作法になりえる大切なこととかつぶやきとか～

水平・垂直は三次元の檻。文化的な、共通言語として一部の人種にのみ流通しているもので自身の造形行為から純粹に発生するものではない。自作で利用することにはとても懐疑的。水平・素直のグリッド上にロジックが添付されている限界から距離を置かなくてはならない。

素材・支持体の一点に意識を立たせてスコープを構えて望むような造形体験や、空間への親和性や知覚のサポートになるような表現に、水平性の強い作品を見た時と同じような心地よさを感じる。

衛星のようにぐるぐると素材・支持体に関わることで時間軸とともに生まれる求心力と斥力の集積の痕跡は物質の制限の中で収束される。2つの方向に伸びる竜巻のようなエネルギーの集積。片方だけ見て、上昇性のように見立て、おもしろがるときもある。これには垂直性の強い作品を見た時と同じような心地よさを感じる。

設置点は流動的で、作品はいつも無重力を漂っていた。

.....

素材・支持体と対峙し始めてから発生する関係性が最も尊い。また関係性を展開させるための補助として、別のレイヤー上において造形体験の中で受けた印象に近い詩的な文をばらまきサブフレームのように物語性を配置する。

イメージや設定を具現化するのではなく、作品に触れる時間の中で蓄積され続けるリアリティの痕跡の追究力、あるいはエネルゲイア（可能態に対する現実態。一略）への誠実さが作品の浸透力というかパンチ力になる。制作ではここに最も注力している。

造形体験を通して得られた『関係性の中に立ち現れる幻影を励起する表現』が作品の本懐で、鑑賞者に辿り着くまでの文脈やシステムのプレゼンテーションを具現化することが目的のものには魅力を感じないという意味で作品には成り得ない。